

木画紫檀碁局と金銀亀甲碁局龕

西 川 明 彦

1. はじめに

木画紫檀碁局（北倉36）（挿図1）とその容器である金銀亀甲碁局龕（北倉36）（挿図2）は『天平勝宝八歳六月二十一日東大寺献物帳』（北倉158）に「木画紫檀碁局一具 牙界花形眼牙床脚局兩邊着環局内／蔵納碁子龜形器納金銀亀甲龕」と記される正倉院宝物成立当初から伝わる由緒の明らかなものである（挿図3）。なかでも碁局は正倉院宝物中の優品の一つに挙げられ、その装飾性の高さだけでなく、構造についても注目され、唐製とみるのが一般的である。

碁局は抽斗を二つ有しており、一方の抽斗の開閉に応じて、もう片方も開閉する仕組みになっている。このことについては、昭和33年に撮影されたX線透過写真から、クランク機構を盤面内部に備えていることが判明しているが、平成20～23年にあらためて調査を行った（挿図4）。

調査に際しては碁局および龕の色料や木画など表面の加飾材料について、実体顕微鏡による細部写真の撮影を行ったほか、蛍光X線分析や可視分光分析を実施した。また、構造についてはX線透過写真の追加撮影を行ったほか、碁局については盤面の裏側2箇所に通された円形孔に内視鏡を挿入して盤面内部の調査を行った。その際に得られた知見については、『正倉院紀要』34号の年次報告に報告したが、本稿はそこでは述べきれなかった材質、構造、技法についての知見を報告するとともに、碁局と龕についての筆者の所見を述べるものである。なお、内視鏡調査に用いた装置は奈良国立博物館より借用したもので、ここに記して謝意を表する。

2. 木画紫檀碁局について

2-1 概要

盤面は現行の碁盤と同じ縦横19路361目（17路289目説もあり）で、法量は縦49.0cm、横48.8cm、高さ12.7cm、重さ3910g。ほぼ正方形の盤面に香狭間を透かし、畳摺を巡らせた床脚を備える。名称に付された紫檀と木画は、いずれも表面に貼られた加飾のことで、木工指物としての構造は別の木材によって形成されている。その素地構造は抽斗を開けた際に、脇からわずかに確認できるのみである（挿図5）。

盤面と床脚の裏側には素地に直接黒漆を塗り、それ以外の表面には厚さ1mmほどの紫檀の薄板を貼り、盤面界線・各稜角・側面文様・床脚剥り面などには白牙すなわち象牙を貼る。また、盤面の周縁と花形眼および側面は白牙・黄楊木・黒檀・金・銀・錫・岩緑青などで構成される木画で飾る。なお、畳摺上面は透明な材を透かして彩絵を見せる伏彩色の技法で飾る。

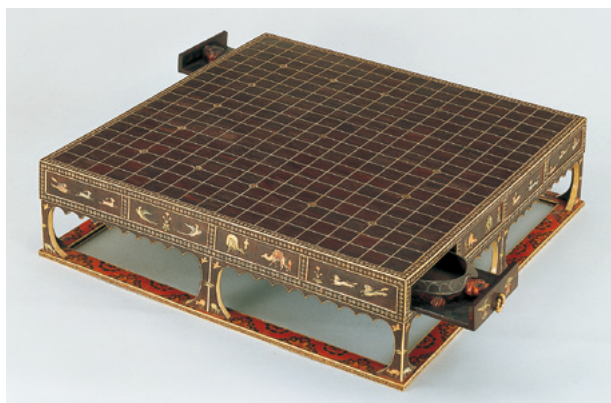


插图1 北倉36 木画紫檀碁局



插图2 北倉36 金銀亀甲碁局籠

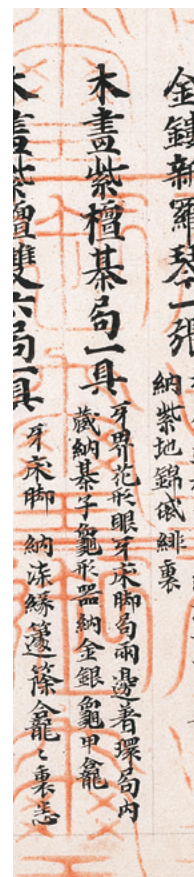


插图3 北倉158 天平勝宝八歳六月二十一日東大寺献物帳 部分

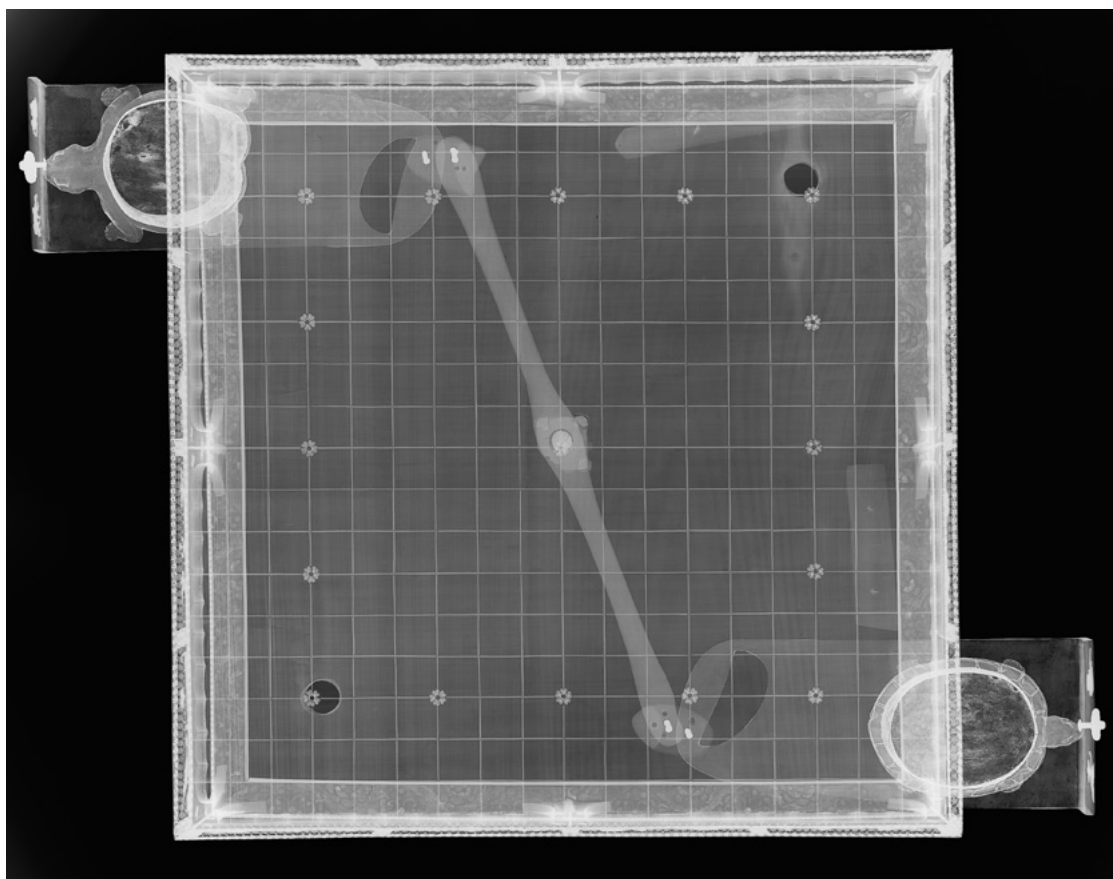


插图4 北倉36 木画紫檀碁局 X線透過写真

盤の側面には抽斗を2つ設ける。盤の4側面はそれぞれ木画で4つに区画し、相對する2側面のそれぞれ左側に位置する1区画が抽斗になっている。抽斗の正面中央に金銅環の引き手を各1箇所取り付け、抽斗内側にはそれぞれ亀と鼈（蟾蜍の可能性もある）をかたどった木製の基石入れを設ける。

2-2 素地の材質・構造

素地は抽斗を引き出した際に、その木口面がわずかにみえる箇所がある（挿図5）。その部分を観察すると、ヤニ様のものが点状に滲み出しているのが確認できる（挿図6）。水分を通す道管がなく、ヤニを貯めたり分配したりする樹脂道が存在するのは針葉樹のうちマツ科の一部に限られるとされる^(注1)。樹脂道には木口面に現れる垂直樹脂道と、板目面に現れる水平樹脂道があるが、本品は上述の木口面のほかに水平樹脂道と思しきものからヤニ様のものが滲み出していることも確認できる（挿図7）。いずれも肉眼観察による所見であり、科学的な調査手法による裏付けが得られているわけではなく、ヤニにみえるものが接着剤の付着である可能性もまったく否定できるわけではない。しかし、木口面にみえるヤニ様の溜まりが色の濃い晩材部に集中しており、このこともこれらが垂直樹脂道である可能性を示している^(注2)。また、このヤニ様のものが滲み出している孔は肉眼で確認できるほど大きく、これは垂直樹脂道の口径が大きいというマツの特徴に合致する^(注3)。



挿図5 北倉36 木画紫檀碁局 抽斗内に窺える素地構造



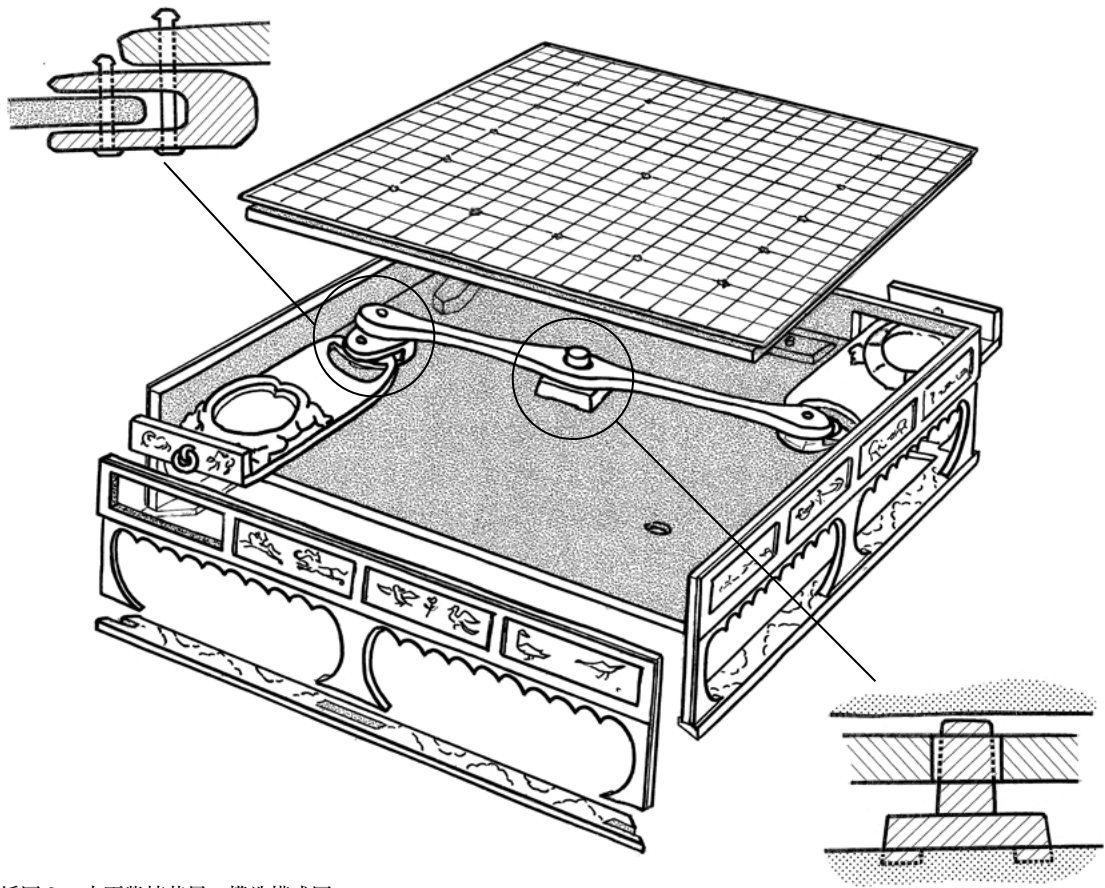
挿図6 同前 素地の木質小口に滲み出すヤニ様物質



挿図7 同前 素地天板 水平樹脂道からヤニ様物質の滲み出し



挿図9 同前 盤面内部 接合部の膠様接着剤

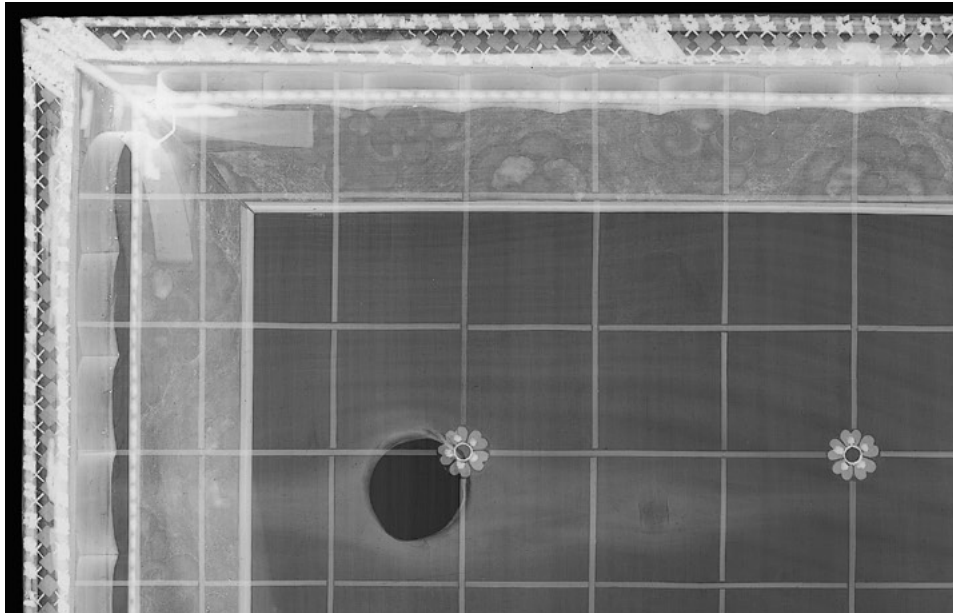


挿図8 木画紫檀基局 構造模式図

なお、本品の4kg近い重量は、後述するように1cmにも満たない板の厚さや中空構造であることなどを考慮すると、針葉樹のなかでも比重の重い木材を用いている可能性がある。紫檀のムク材を用いているのならば理解できるが、紫檀は厚さ1mm足らずの薄い板に加工したものを表面に貼っているだけであり、それによって重量が大幅に増すとは思えない。ちなみに、クロマツは針葉樹のうち比重が最も重く、上述の材質の観察結果とも符合する。

素地の指物構造については、側板4枚を口字に組んで、一枚板の天板をその上端に、同じく一枚板の底板を刳形のやや上の位置にそれぞれ詰め込んで取り付ける“大入れ”とし、盤面内部を中空構造とする^(注4)。各側板は床脚と一材で、一枚板に格狭間を切り透かし、下に畳摺を取り付ける（挿図8）。各辺中央の床脚には裏側に円柱を縦に半切したものを取り付けて補強する。側板を口字に組む仕口については不明であるが、接合には接着剤を用い、要所には釘を打つ。内視鏡観察やX線透過写真によると、釘は金属製ではなく木製で、接着剤は膠様のものが窺え（挿図9）、天板と底板は木目が直交するように用いていることなどが確認できる（挿図10）。なお、天板の取り付けは、後述するクランク機構などの盤面内部の施工後に行っている。抽斗の無い2辺側の盤面底板の左側隅には径2cmほどの円形孔が穿たれているが、片側の孔は底板の節穴を利用している。この孔は抽斗の開閉を滑らかにするための空気抜きなどの目的が考えられるが、確かな用途はわからない（挿図10）。その円形孔より盤面の内部を計測すると、天板および底板は厚さ1cm前後（素地および表面の薄板貼りを含む）、天板と底板の間

の空間部分の高さは3 cm弱となる（挿図11）。また、底板内面には格子あるいは亀甲や曲線状の墨線および罫引き線が確認できるほか（挿図11・12）、抽斗を開けた際に露出する内側の木地部分や盤面の裏側のふたつの円形孔から窺える天板内側の木地を墨で塗る（挿図13）。墨線と罫引き線について具体的なことは不明であるが、本品の製作に関わる割り付け線とは考え難く、後述する龕の製作との関係を視野に入れるべきであろう。



挿図10 北倉36 木画紫檀基局 X線透過写真（部分）
天板と底板の木目は直交している



挿図11 同前 盤面内部 底板上面の墨線



挿図12 同前 盤面内部 底板上面の罫引き線

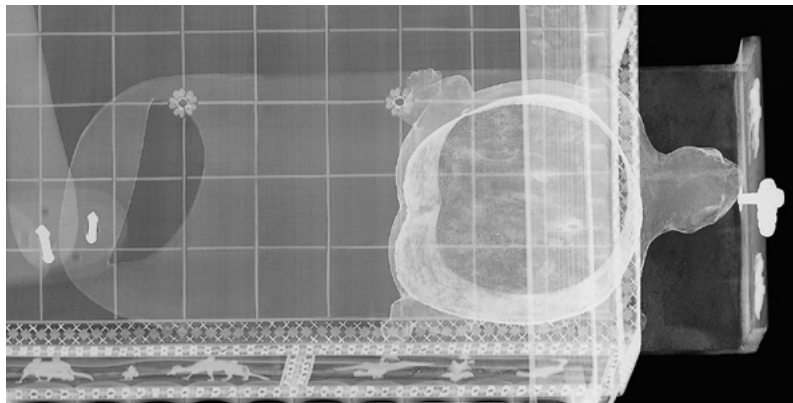


挿図13 同前 盤面内部 墨塗り部分

2－3 抽斗の材質・構造

抽斗は幅約10cm、奥行き約25cm、厚さ約0.6cmの長方形板の奥側の角を丸めて舌形に作ったものを底板とし、その手前側に縦約3cm、横約10cm、厚さ約0.6cmの板を載せて接着し、側面から見てL字状に組む（挿図14）。引き手は表裏に銀製の円形座金を当てて、金銅製で連珠状の遊鑲を備えた壺金具を差し通してかしめ付ける。木製の亀鼈形容器は底板上面に接合して取り付ける。

抽斗のL字の板組は樹種不明の木材に黒漆を塗る。亀鼈形容器のうち、亀形は顔や手足を金箔貼りとし、目や皺を墨描きして油状のものを塗る。甲羅は樹脂に碎石粒を混ぜたような黒色地に、銀線を象嵌して亀甲を表し（挿図15）、甲羅の内側の容器部分は赤色を塗った上に漆様の樹脂を皺状に塗っている（挿図16）。鼈形は木地に白色下地を施して金箔を貼り、その上に暗赤色の油状物質を塗る（挿図17）。容器部分は亀形同様に赤色塗りの上に漆様の樹脂を塗って、皺仕上げとする。



挿図14 北倉36 木画紫檀碁局 X線透過写真（部分）



挿図15 同前 亀形抽斗 甲羅部分（×4.8）

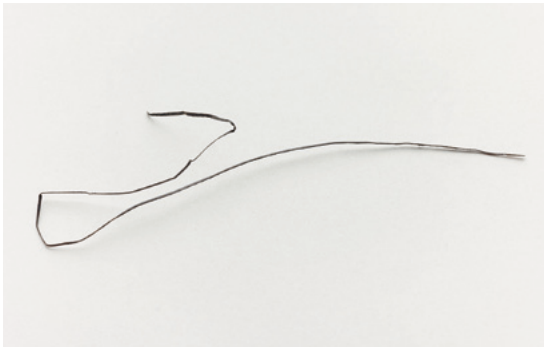


挿図16 同前 亀形抽斗 容器内部の皺塗り（×12.8）

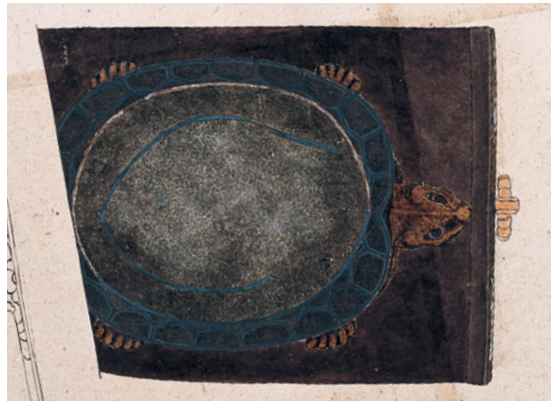


挿図17 同前 鼈形抽斗部分

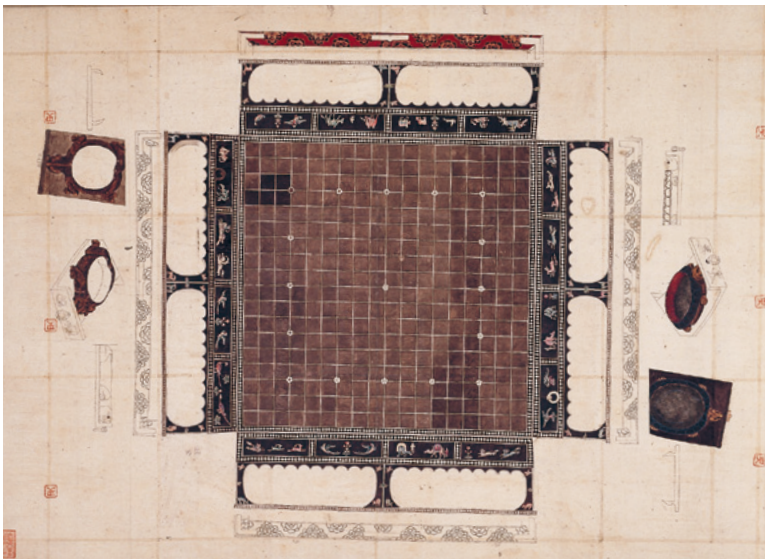
なお、今回の調査の際に亀形の甲羅に用いられているものと同じ銀線が盤の内部より発見された（挿図18）。この銀線については、明治8年頃に作成された本品の拓本およびそれを元に描かれた細密画をみると、亀形容器に収納されている状況が描かれている（挿図19・20）^{（注5）}。本品は明治35年に白牙界線、木画の花形眼、および盤面裏側の漆塗膜の剥落を修理しているが、銀線については脱落していたことも、修理されたことも記録にみえない^{（注6）}。また、本品については大正15年および昭和58年にも調査が実施されているが、銀線の修理についての記録はみられない。しかし、現状において脱落箇所が新材で補われていることが確認できる。これらのことから、亀形の修理は明治35年よりも前に行われ、今回見つかった銀線は抽斗から盤面内部の中空部分に入り込み、その存在が忘れられて今日に至ったものと考えられる（挿図21）。



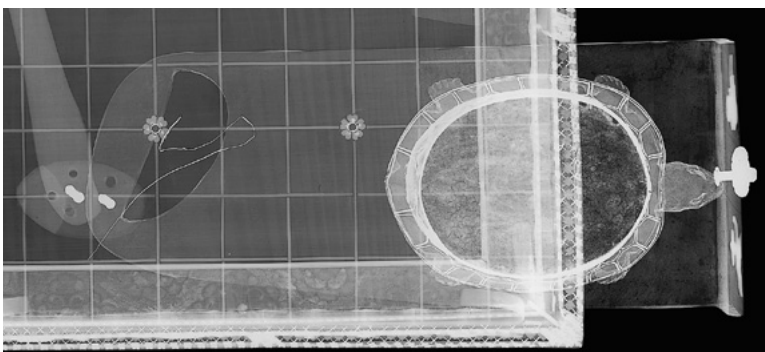
挿図18 北倉36 木画紫檀基局 発見された銀線



挿図20 同前 銀線を収納している状況が描かれている



挿図19 正倉院御物図32 「正倉院御物基局図」部分
（東京国立博物館蔵）



挿図21 北倉36 木画紫檀基局
X線透過写真（部分）
盤面内部に入り込んだ銀線

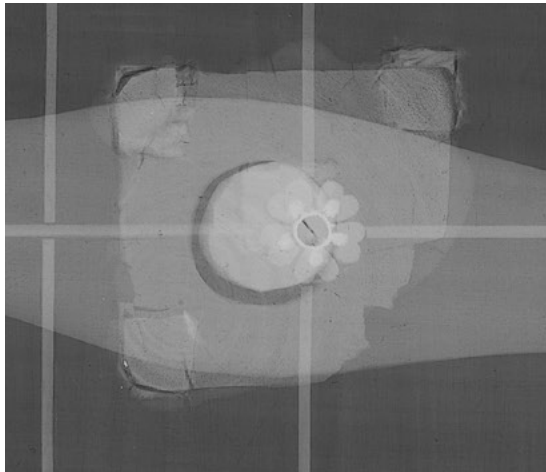
ところで、両方の抽斗の底板には歪んだ蒲鉾形に削り抜いた大きな孔がその奥隅に確認できる（挿図4）。この孔は本来は抽斗の開閉に供するために穿たれたもので、現代の“溝カム”という機械機構に相当するものである。この孔は現状においては抽斗の開閉に関与していないが、製作当初の段階において、片方の抽斗の開閉に応じて後述する腕木の動作が連動するように設けられたものと考えられる。しかし、この溝カム機構がうまく作動しなかったためか、途中でこの蒲鉾形の孔を用いる設計を取り止めて、後述する木製の連結具を使う現状の仕組みに改めたものと考えられる。この碁盤には構造的な修理の形跡が確認できないことから、おそらく天板を取り付ける前に、上述のように当初の設計を変更したものと思われる。

現状における抽斗の開閉装置は、いずれも木製部材で構成されている。盤面の底板中央には1辺約35mmの方形座の上に径約14mmの円柱形の軸を造り出したものを取り付けてクランクの支点とし、そこに中心に円孔が穿たれた腕木を通してある。支点となる軸は方形座と円柱形の軸に同一の木目を通っていることから、一材から造り出したものであることがわかる（挿図22）。さらに、方形座は隅角が1箇所欠けており、残る3つの隅角と中央の円柱軸の下方にそれぞれ1辺約8mmの四角い脚を造り出す。この脚が接する底板の部分はわずかに掘り下げられ、脚を填めて接着剤で固定している（挿図23）。この脚は軸木と底板の接合を堅固にするためと思われるが、方形座の一部を欠いたまま用いるなど、場当たり的な加工を行ったように見受けられる。方形座は樹種不明で木目の細かい芯持材を小口取りしたものを用いており、とくに隅角に造り出された脚の辺りは乾燥のために木目に直交するように割れが数箇所入っている。脚の欠けた隅角に対応する箇所には底板に穴が穿たれておらず、また不自然な中央の脚の存在など、いずれも製作途中に方形座の一隅が欠けたのに伴い、施工箇所を変更した結果かと思われる。

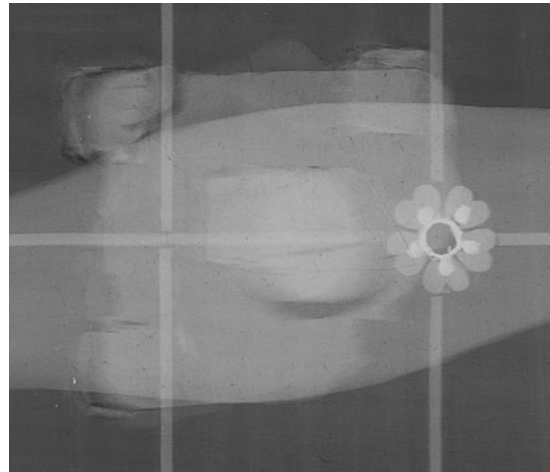
腕木は40cmほどの長さで、軸を通す中央、および両端の連結箇所が膨らんだような形状に作り出す（挿図4）。つまり関節に当たる部分の強度をもたせるべく、太く作ってある。

腕木はその両端に取り付けられた木製の連結具（駆動関節機構）を介して両方の抽斗底板の奥に連結される（挿図4）。2箇所ある木製の連結具は上から見た形状が双方で異なり、亀形側は卵形、鼈形側は猪目形を呈する（挿図24・25）。このように双方の連結具の俯瞰形状は異なるが、断面形状がコ字に削り込まれている点は共通する。そのコ字の部分で抽斗底板をくわえるように挟み、腕木および抽斗底板とは金属鋳（金色を呈し、緑青錆が生じていることから、黄銅や佐波理など、銅の合金製の可能性が考えられる）を各1本ずつ貫通させてかしめる（挿図26・27）。この金属鋳は腕木の回転運動に応じて抽斗が前後するように、木部との間に遊びをもたせて打ち付けられている。以上の装置をもって、中央の軸木を中心に、上から見て反時計方向に腕木が回転するのに応じて、両方の抽斗が出るような仕組みとなっている。なお、抽斗の開閉に支障のないように、盤の内部の底板上には抽斗のガイドやストッパーとなる長方形の木片が木釘で無造作に取り付けられている（挿図28）。木片は亀形側の抽斗の横および鼈形側の抽斗の奥に位置している。前記鼈形側の連結具が猪目形であるのは奥に取り付けられたストッパーの先端が剣先形に作られており、その形状と合致するように削ったためと思われる。

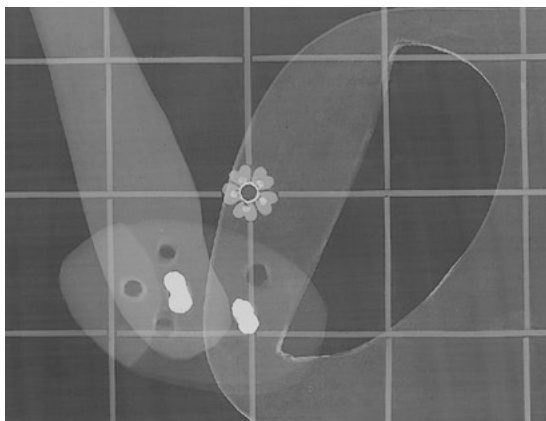
(挿図29)。また、木製の連結具には金属鉾を通すためと思われる孔の痕跡がいくつか確認できるが、抽斗を滑らかに開閉するために試行錯誤を繰り返した、苦心の跡かと思われる(挿図24)。これらの装置の加工は、前述のように基盤の天板を取り付ける前の段階において、動き方を確かめながら行ったものと考えられる。



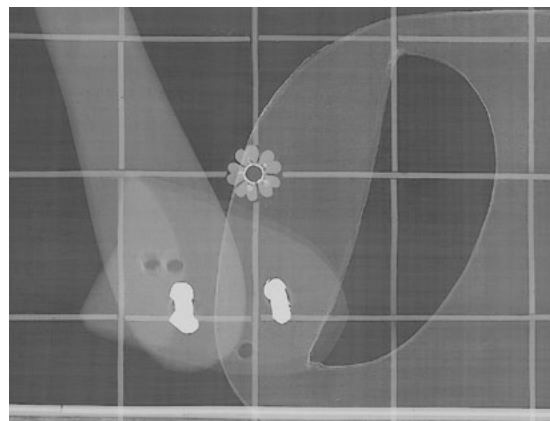
挿図22 北倉36 木画紫檀基局 X線透過写真(部分)
円柱形の軸と方形座に同じ木目が通る



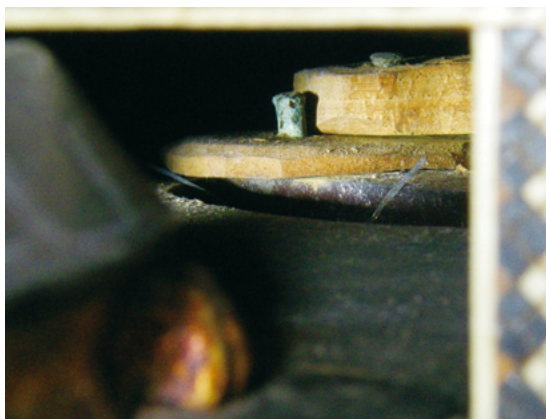
挿図23 同前 X線透過写真(斜め俯瞰部分)
方形座に造り出された脚が底板に填まる



挿図24 同前 X線透過写真(部分)
亀形側連結具は卵形



挿図25 同前 X線透過写真(部分)
亀形側連結具は猪目形



挿図26 同前 亀形抽斗奥 木製連結具および緑青錆が生じた金属鉾



挿図27 同前 鼈形抽斗奥 木製連結具および金色を呈した金属鉾

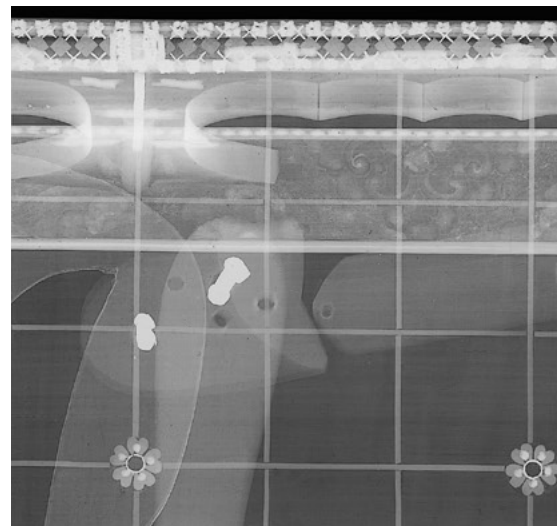
2-4 加飾の材質・構造

構造に関する記述につづき、表面の加飾について述べる。まず、天板と畳摺の裏面および床脚と畳摺の内側面に漆を塗る以外は、地の部分にいずれも厚さ1mmほどの紫檀の薄板を貼っている。なお、盤の4側面を各面4区画に区切った鏡部分には共通した木目や矧ぎ合わせ目が確認できる（挿図30・31）。これは貴重な紫檀材を有効に用いるために、あらかじめ寄木にしたものを薄く切って貼り込んだものと思われる。正倉院宝物のうち、一部の欠失を補う程度の紫檀の矧ぎ合わせはいくつか確認できるが、このように紫檀の単一材を寄木にして、それを薄くスライスする手法を用いたものは他に例をみない。

盤面上面の花形眼は、木画で五弁花をかたどったものを盤面に穿たれた円穴に嵌め、花文の周囲に暗紫色を呈した樹脂を充填する。五弁花は、円形の黄楊木に錫線を巻いた花芯と、白牙を心葉形にかたどり、その内側に緑青・金粉を樹脂で充填した花卉で構成されている（挿図32）。なお、花形眼には銀錆様の青黒い変色がみられ、分析で銀（Ag）が検出されていることから、粒子を確認したわけではないが、花卉の内側には銀粉も充填されている可能性が考えられる。盤面の周縁および側面の区画には白牙角棒で挟んだ髹文木画を貼る。この髹文木画は黒檀と白



挿図28 北倉36 木画紫檀基局 盤面内部 抽斗奥に取り付けられたストッパー



挿図29 同前 X線透過写真(部分)
抽斗奥のストッパーが剣先形を呈する



挿図30 北倉36 木画紫檀基局 側面部分 隣り合う区画の紫檀の接ぎ目が共通する



挿図31 同上

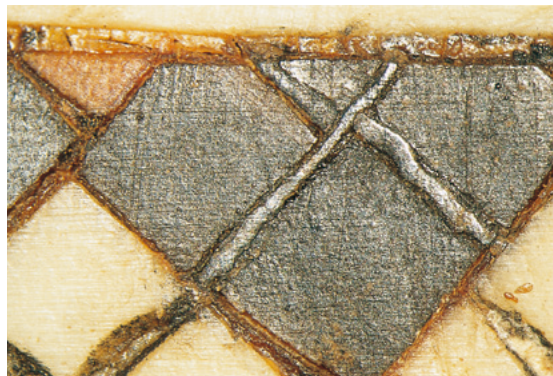
牙、それに黄楊木を組み合わせている。黒檀は田の字に4分割したパーツの間に錫薄板を挟んだものであるのに対し、白牙は四角形の一材に十字の線を彫って暗赤色の充填物を注している（挿図33）。なお、白牙に刻まれた十字線は黒檀にはみ出しており、組み上げた状態で線彫りを行ったことがわかる（挿図34）。

盤面の4側面および床脚外側面の紫檀地には鳥獣、花卉、人物などの文様に彫った白牙を象嵌する。紫檀の木地は白牙文様の大まかな形に彫り込んで、白牙の文様を嵌めたのち、文様と紫檀地の隙間には紫檀の色に似た暗紫色の樹脂様のものを充填し、紫檀地と同じ面の高さになるように平らに研いでいる。文様には楔状の線を連続させたような針描きや毛彫りで表情豊かに描線が施され、線には黒色のものを注して強調し、部分的に藍や臙脂などで彩られ、いわば白牙撥鏤とでもいうべき技法を用いている（挿図35・36）。

白牙を彫った文様は厚さ1mm程で、さらに幅が1mmにも満たないような非常に細い線に切り透かしているような箇所も見られ、その加工は精緻を極める。しかし、白牙文様と紫檀地の間の充填物が剥がれたり、薄くなった箇所があり、その下に文様と同質の白牙が窺える（挿図35～37）。このことは、表面に見えている文様が薄肉彫りの凸部であることを示している。つ



挿図32 北倉36 木画紫檀基局 盤面の花形眼 (×8)



挿図33 同前 髹文木画 黒檀を4分割して間に錫薄板を挟む (×12.8)



挿図34 同前 髹文木画 白牙に刻まれた十字線がはみ出す (×12.8)



挿図35 同前 白牙文様の線刻に黒色物質を注す (×8)

まり、レリーフ状に文様を表した白牙の薄板を紫檀地に嵌め込んだのち、レリーフの彫り下げられた間地にも充填物を盛っているものと思われる。文様がレリーフであれば、切り透かす場合と比較すると、彫り出し易く、折れにくい合理的な手法といえる。

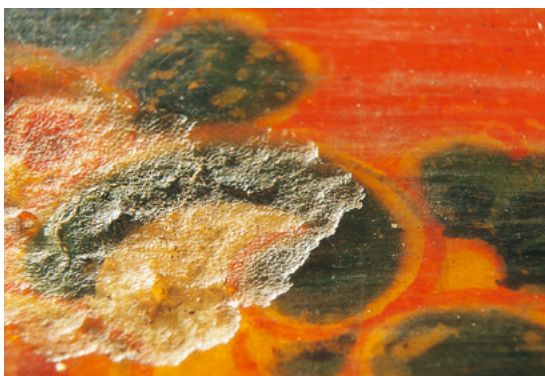
畳摺は上面に赤地暈縹唐花文の伏彩色を施した透明な角質様物質を貼り（挿図38）、外側面は盤面の周縁および側面と同様の梵文木画を、各稜角には白牙角棒をそれぞれ貼る。木画は盤側面と同工で、黄楊木と白牙で構成されるが、充填物の色調が黒色を呈する点が異なる。伏彩色の手順は、薄墨線の下描きの上に彩色が塗り重ねられている状況および破損部から紙様のものが窺えることから、唐花文を描いた紙を畳摺に貼り、その上に角質様物質を貼り重ねたものと考えられる（挿図39）。なお、白牙撥鏤や伏彩色に用いられた色料については『正倉院紀要』34号年次報告「調査3 木工品」に詳述されているので、ここでは割愛する。



挿図36 北倉36 木画紫檀基局 白牙文様に藍や臙脂を塗る。また、薄肉彫り間地が露出する（×1.8）



挿図37 同前 充填物が剥落し、白牙文様の薄肉彫り間地が露出する（×4.8）



挿図38 同前 畳摺上面 角質様物質の虫損が裏の彩色に及んでいない（×4.8）



挿図39 同前 畳摺上面 墨線描きの上に彩色が塗り重ねられている（×4.8）

3. 金銀亀甲碁局龕について

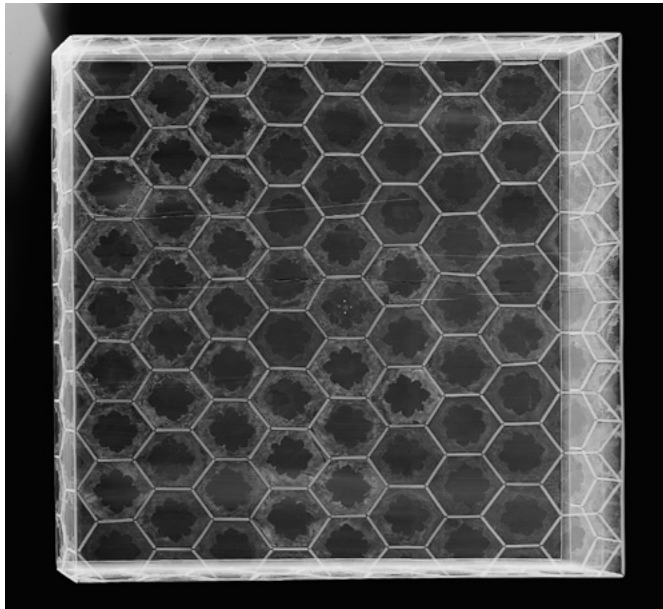
3-1 概要

合口造りの箱で、身の四隅に舌を付けて蓋掛かりとする。法量は縦53.7cm、横53.1cm、高さ15.9cm、重さ5868g。本品についても碁局と同様に表面には素地は露出しておらず、正確な樹種は不明ながら、木材で素地構造が作られていることがX線透過写真により確認できる。天板および外側面の表面には、六角形に切った角質様物質の薄板を亀甲形に貼り継ぎ、内面と底裏には漆を塗る。

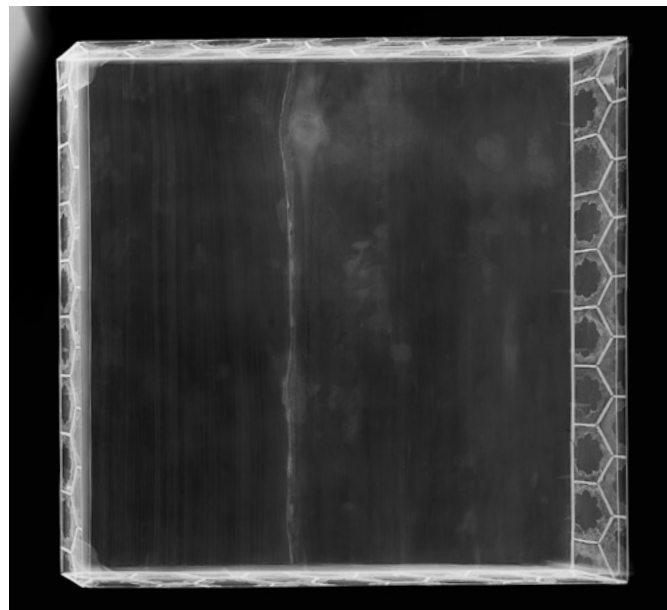
亀甲形の区画や箱の稜角および合口部の縁には白牙（鹿角の可能性もあるが、その用材の長さから象牙と推測される）の角棒を貼る。六角形の角質様物質は透明で、裏側に唐花文が描かれ、それを表側から透かしてみせる伏彩色の技法を用いる。唐花文は墨で描かれ、その文様部分に金箔と銀箔を交互に貼り、地には緑色を塗る。

3-2 素地の材質・構造

本品については素地構造を窺うことができるような箇所は一切なく、X線透過写真に写し出された木目から、蓋天板および身底板は針葉樹らしき一枚板の使用が推測される。また、蓋天板と身底板の材はいずれもその木理の表情が似通っており、同様の箇所に枝節を有することから共木を用いた可能性が考えられる（挿図40・41）。なお、碁局の底板の木理とも似寄りで、とくに龕の蓋天板は大小の近接した枝節を有する点も碁局の底板と合致する（挿図42）。各面



挿図40 北倉36 金銀亀甲碁局龕 蓋
X線透過写真



挿図41 同前 身 X線透過写真

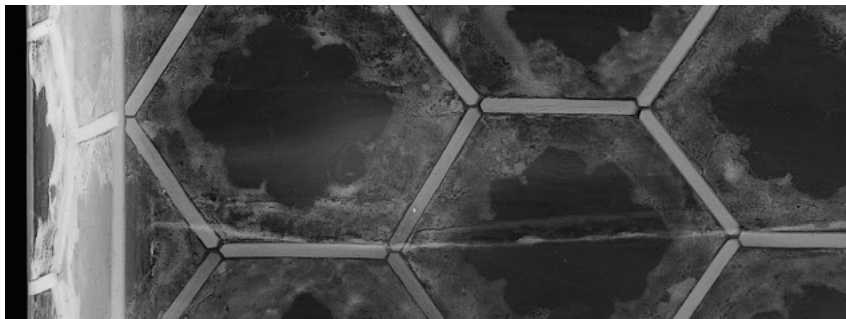
の厚さは表面に貼られた加飾を含めても1cmほどで、その厚さの木工指物にしては6kg近い重量があることから、この龕についても針葉樹のうち比重の重い木材を用いた可能性が高い。後述するように、碁局と龕が同工であることを考え合わせると、本品についてもマツを使用した可能性が考えられる。

素地の構造は側板4枚を口字に組み、その上下小口に一枚板の天板と底板を各辺6ないし7枚組接ぎとし、それぞれ側板および天板上面と底板下面より釘打ちして止める。側板の4隅の仕口は不明で、各部材の接合には木釘と接着剤を併用しているものと思われる（挿図43）。

このようにして、一旦は蓋と身が一体となった中空の箱を作って素地とし、その外面に装飾を貼り込んだ後、蓋と身に分断する“太鼓作り”と呼ばれる方法で作られている。この方法を用いることにより、蓋と身の合口部分をずれることなく、ぴったりと合致させることができ、また後述の加飾工程とも関わるが、側面に貼り込まれた文様を蓋と身にかけて破綻なく連続性をもたせることが可能となる。

3－3 加飾の材質・構造

前項で述べた“太鼓作り”の特徴を示すものとして、表面に貼られた文様の連続性だけではなく、角質様物質自体に見える天然の斑文が蓋と身にわたって通っていることが挙げられる。また、箱の稜角に巡らせた角棒の合わせ目は、角棒の先端角を剣先形にしたものを三方から寄せているが（挿図44）、合口部分は縦材を段欠きにして横材を組んでいる（挿図45）。このよう



挿図42 北倉36 金銀亀甲碁局龕 蓋 X線透過写真（部分） 大小の枝節



挿図43 同前 身 X線透過写真（部分） 木釘による接合

に合口に貼られた白牙が他と異なった仕口を呈するのは“太鼓作り”と関係するもので、蓋と身に挽き割った後に合口部分を整えたことを示している。なお、白牙製の角棒は亀甲形の区画や箱の稜角などに貼り付けたのち、表出する各面の中央に直線を刻み、黒色物質を充填している。白牙が貼り付けられた後に線刻が行われていることは、線のはみ出しや白牙の段差を鑢掛けして平滑に整えたのちに線が刻まれた状況からもわかる。

天板および外側面の表面に貼られた透明な角質様物質については、過去の材質調査において、玳瑁などのウミガメの背腹甲鱗板ではなく、馬爪又は牛爪の可能性も指摘されたが、結論には至っていない(注7)。角質様物質には^{せんす}鑢剥きによる厚さの調整の加工痕と思われる多方向の細かい筋が確認でき、技法上の観点から、韓国の華角貼に用いられている牛角と類似するが、具体的な材質については不明である。



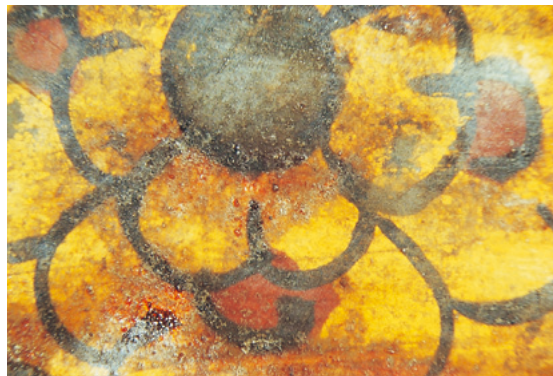
挿図44 北倉36 金銀亀甲碁局龕 蓋 稜角の合わせ目 (×4.8)



挿図45 同前 身 合口部の稜角の合わせ目 (×4.8)



挿図46 同前 角質様物質の花文墨描きの外に緑色を塗り、その下に金箔を確認 (×4.8)



挿図47 同前 天板中央の花文 墨描き後に花芯と花卉に点彩 (×4.8)



挿図48 同前 角質様物質の破損部から下に金箔と紙が窺える (×12.8)

一定の厚みに加工した角質様物質には唐花文様の下描きや当たり線などがみられない。しかし、文様の大きさや細かい描線がほぼ同じように仕上がっており、何らかの粉本を用いたことが推測できる。おそらく、角質様物質が透明であることから、粉本を角質様物質の下に当てて、それを透かして墨で直に写し取ったものと考えられる。次に、その墨描きの周囲の地部分に緑色を塗り、花文の部分に金箔または銀箔を貼る（挿図46）。なお、天板中央に位置する亀甲形にのみ花文の中心部にも彩色が施されており、墨描の後に花芯に緑色を、その上下左右の花弁に赤色を点彩していることがわかる（挿図47）。以上の手順に関しては顕微鏡観察によって描線と彩色の重なった状況から確認できるが、さらにその後、彩色の下に紙を貼っていることが、角質様物質の破損部から窺える（挿図48）。その理由としては、彩色を終えた角質様物質は天地裏返して箱本体へ貼付するが、その際用いる接着用の膠や木地自体の色によって伏彩色の発色が悪くなることを避けるため、あるいは角質様物質を本体に貼り付ける時に食い付きを良くするためなどが考えられる。

なお、破損部から観察すると、上述の手順とは異なり、紙に彩色および箔押しがなされているようにもみえる。ただし、唐花文の墨線外郭際を緑色で丁寧に塗り分けており、緑色地の彩色は紙にではなく、角質様物質に施されているものと思われ、金箔と銀箔のみが紙に貼られていた可能性も残る。

4. 碁局と龕の共通点

木画紫檀碁局を金銀亀甲碁局龕に収納した場合、上面と4側面はいずれも5mmにも満たない隙間しか空かない箇所もあり、当初から一具のものとして設計・製作されたことは明らかである^(注8)。また、上に述べた用材および構造などに以下のような共通点が見いだせることも、碁局と龕が同工であることと関連があるものと思われる。

- ①いずれも木工指物としての素地構造をマツ材で製作しているものと思われ、その木理が似寄りであることから、同じ木材から製材した板を用いていることが推測できる。
- ②碁局の畳摺上面および龕の亀甲形に角質様物質が貼られており、そこに同じ唐花文が表されている。ただし、碁局は主文のみが龕と同意匠で、暈綯彩色が施されているのに対し、龕は白描で、文様の寸法が碁局と比べて若干小さい。また、角質様物質の下に紙が存在する点は共通するが、伏彩色の手順については前述のように碁局と龕では異なっている。
- ③碁局の畳摺の一辺に、龕の白牙界線と同じように線を刻み、黒色の充填物を注した白牙角棒が用いられている。ただし、龕の白牙は組立て後に線刻を施していることから、龕の端材を用いたものとは考えられない。
- ④碁局の底板内面に、龕の亀甲に関係しそうな墨線や罫引き線が確認できる。
- ⑤岩緑青には亜鉛（Zn）を伴うものの報告があるが^(注9)、碁局と龕の彩色に用いられている銅系緑色顔料からはともに少量の亜鉛（Zn）が検出されている。

5. おわりに

献物帳には百済の義慈王から藤原鎌足に贈られた「赤漆櫨木厨子」の納物として、碁石を納めた銀平脱合子（北倉25）が記載されており、それらの納物についても百済から贈られたとする説がある^(注10)。そして、銀平脱合子の記載後に楽器類をはさんで木画紫檀碁局（北倉36）と金銀亀甲碁局龕（北倉36）が列記されていることから、これらの囲碁に関係する品についても、すべて百済の関連品とする向きもある。また、宝物の大仏奉献からちょうど100年後の曝涼点検の際に作成された斉衡3年雑財物実録（北倉165）には、「漆櫨木厨子」という厨子の納物として木画紫檀碁局と金銀亀甲碁局龕が銀平脱合子などとともに記載されている。その「漆櫨木厨子」を百済の「赤漆櫨木厨子」と解して、これら囲碁関係の宝物を百済と結び付けるような考え方もあるかに思われる。しかし、そもそも記載されている「漆櫨木厨子」が「赤漆櫨木厨子」であるかどうかは定かではなく、また、納物と厨子の来歴が必ずしも一致しないことは、『正倉院紀要』34号所載の拙稿において述べたとおりである^(注11)。したがって、献物帳や曝涼点検の記載から、ただちにこの碁局と龕を百済に関連付けることはできないのである。

しかしながら、木画紫檀碁局は花眼（星）の数が17個であることから、李氏朝鮮まで行われた朝鮮の様式に等しいという指摘がある^(注12)。たしかに、献物帳記載品ではないが、正倉院には木画紫檀碁局以外に桑木木画碁局（中倉174）とよばれる8世紀の碁局が2面伝わるが、それらの花形眼の数が現在においてもわが国で行われているものと同じ9個であるのに対し、木画紫檀碁局の様式はそれらとは異なっている。

また、本稿で明らかにしたように木画紫檀碁局と金銀亀甲碁局龕はともに素地の構造材にマツ材を用いているものと思われ、正倉院宝物中において唯一のマツの使用例といえる^(注13)。わが国では近世以降は別にして、古代において、マツはそのヤニの多さから、建築や土木、あるいは燃料材としての需要が多く、その割裂性の低さから、敢えて工芸材料に用いる必要がなかったものと思われる。もちろん、このことのみで製作地を判断することはできないが、とくに朝鮮半島においては、木簡をはじめとして、身近な用材として、マツの使用が極めて多い状況がある^(注14)。

さらに碁局と龕にみられる角質様物質を貼る技法についても、朝鮮半島で盛行した華角貼と呼ばれる工芸技法と同様である。華角貼では牛角を用いるが、碁局と龕に用いられた角質様物質も科学分析を経たわけではないものの、材質的に似寄りである。ただし、華角貼は彼地において19世紀に盛行し、17世紀の後半頃までしか遡ることができず、8世紀の本品とは時代的な隔たりがある^(注15)。

ほかにも碁局には、紫檀の寄木に、薄肉に彫ったレリーフ状の白牙で表す木象嵌や木画を組んだ後に線刻を施すなど、正倉院宝物中において他に例のない技法が窺える。

正倉院宝物について、工芸技法の観点から製作地を判定することは容易くないが、取りわけ朝鮮半島製の判別は困難である。それは、朝鮮半島において、比較対象となる8世紀の遺例が少ないことや、わが国と同様に唐朝工芸の影響を少なからず受けていることによる。宝物のう

ち新羅墨や新羅琴、あるいは佐波理製の宝物のように銘文や文化史的背景、材料学的な特徴から明らかなものを除いては、彼地の製作か否かの判断はきわめて難しい。

しかし、上で述べたように木画紫檀碁局および金銀亀甲碁局龕について、材質や技法の面から朝鮮半島との関連を示すような要素がいくつか認められ、従来の唐製説に加えて、朝鮮半島で作られた可能性が浮上してきた。今後は彼地における同様の古文化財の調査を待って、それとの比較、照合作業を通じて、さらに詳細な検討を加える必要を感じている。

注

- (1) 伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学』海青社、2012
- (2) 島地謙『木材解剖図説』地球出版、1964によると、一般的に樹脂道は未成熟材部では早材部にも分布する傾向をもつが、成熟材部では早材から晩材への移行部から外側に散点状に分布するとされる。本碁局は50cm四方の一枚板が用いられていることから、成熟材と考えられる。
- (3) 貴島恒夫・岡本省吾・林昭三『原色木材大図鑑』保育社、1962
- (4) 天板は段欠きにして包打付接ぎとし、底板は枿を造り出して追入れ接ぎとしている可能性もある。
- (5) 東京国立博物館列品番号A9326正倉院御物図32「正倉院御物御碁局図」
- (6) 東京国立博物館館史資料1055『正倉院御物修繕還納目録』
- (7) 内田至「正倉院宝物の海ガメ類材質調査報告」『正倉院年報』13、1991
- (8) 金銀亀甲碁局龕は4隅に蓋掛かりのための舌が付くため、有効内寸は縦横ともに約51cmとなる。木画紫檀碁局の最大幅は畳摺の縦横で、ともに50.2cmあり、碁局を龕に納めた場合、各4mmほどしか隙間が空かない。また、龕の内寸高さは13cmほどで、碁局の高さ12.7cmとの差は3mmとなる。
- (9) 早川泰弘「銅系緑色顔料の多様性とその使用例」『保存科学』48、2009
- (10) 関根真隆「献物帳の諸問題」『天平美術への招待』吉川弘文館、1989、初出1979
- (11) 西川明彦「赤漆文欄木御厨子と〈赤漆欄木厨子〉」『正倉院紀要』34、2012
- (12) 増川宏一『ものと人間の文化史59 碁』法政大学出版局、1987。なお、大島正雄「安玲二氏の巡将碁仮説」『棋道』1・2月号、1996では木画紫檀碁局を百済義慈王と関連付けて、この朝鮮の碁法の開始を7世紀とする林裕、安玲二氏らの説を紹介している。しかし、本文中述べたように本碁局は義慈王とは関係はなく、この碁法は一般的には16世紀末頃までしか遡れないとされる。
- (13) 正倉院事務所編『正倉院の木工』日本経済新聞社、1978の個別解説によると、桑木木画碁局第1号螺鈿撥鏤荘（中倉174）の素地に用いられている材についてアカマツである可能性が示されている。しかし、執筆者の一人である林昭三氏は「藤ノ木古墳・正倉院・桂離宮－古い木材と樹種の識別－」『木材研究・資料』第25号、1989においてアカマツをヒノキに改めている。
- (14) 国立昌原文化財研究所『韓国古代木簡』芸脈出版社、2004および東野治之『日本古代史科学』岩波書店、2005などによる。
- (15) 高橋隆博「朝鮮の華角貼」『関西大学東西学術研究所創設50周年記念論文集』関西大学東西学術研究所、2001